コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2022年12月13日

Lancet:

人種差別、外国人排斥などの差別主義が健康にどのように影響を与えているか

【松崎雑感】

Covid 19のキーワードでこの論文が引っ掛かりました。このテーマで最新のLancetに二つの論文が掲載され、そのうちの1論文の要旨を紹介します。キーとなるメッセージの部分を抄訳しましたが、結構考えさせられる内容です。

非科学的な「理由」で、人々の健康に生きる権利が蹂躙された歴史を紹介しています。それは昔の日本もそうだったという指摘が身に沁みます。あれこれのもっともらしい理由を付けて、命を選別することは許されません。 みんな一生懸命に生きています。

もう一つの論文は後日紹介します。

松崎道幸　道北勤医協ながやま医院　matsuzaki-m@dohoku-kinikyo.or.jp

人種差別、外国人排斥などの差別主義が健康にどのように影響を与えているか

Devakumar D, Selvarajah S, Abubakar I, et al. Racism, xenophobia, discrimination, and the determination of health. *Lancet*. 2022;400(10368):2097-2108. doi:10.1016/S0140-6736(22)01972-9

要旨：人種差別、外国人排斥などの差別主義を推進する社会構造が、人々の健康にどのように影響をもたらしているかを分析する。本稿では、用語の定義と基本原則などの概念モデルを呈示する。まず、認識的不正義（誤った知識に基づく不正義。次の2種類がある：証言をめぐる不正義＝黒人や女性が裁判などで発言をしても信用してもらえない。解釈をめぐる不正義＝産後うつやセクシャル・ハラスメントといった言葉ができる以前、女性たちは自分たちの経験を単なる個人的な問題や“気のせい”としてやり過ごさなければならなかった）、人体実験、歴史の誤解釈に基づく人種に関する誤った理解について検討した。特に、社会に浸透して、健康を損なう結果をもたらす分断と階層的作用力の基本構造を分析した。われわれは現在、少なくない国々で、ポピュリストの指導者がヘイト政策を推進するという歴史的な分岐点に立っている。これらの指導者は、人種差別、外国人排斥などの差別を拡大する政策を強行して、人々の分断支配を行っており、人々の健康に短期的、長期的に悪影響をもたらしている。新型コロナパンデミックと人種差別をなくする国際的運動は、構造的な人種差別の蔓延の問題であることを再確認する。

キーメッセージ

- 人種差別、外国人排斥をはじめとした差別は、健康に対する決定的な悪影響をもたらすことを踏まえ、公衆保健対策を阻む障害物と認識すべきである。
- 人種差別、外国人排斥などの差別が健康にもたらす悪影響は、カースト、エスニシティ、先住民、移民、人種、宗教、皮膚の色などこれまでに研究されてきたあらゆる局面で現れている。
- 差別主義的イデオロギーに基づいた科学研究が実施され、それらが差別を助長する方向で解釈されてきたという歴史があったが、現在でもそれは続いている。
- 自分が他者と異なるという優越性の認識および、それに基づいた階層的パワーを持つという二点が分断の根拠となり、差別を作り出す基本構造的プロセスとなっている。
- 不健康および健康の不平等は、構造的、歴史的、政治的背景に基づいた人種差別、外国人排斥などの差別から生み出される。これらの複雑なプロセスを理解して対策を行わない限り、個人間の差別解消は達成できない。
- ポピュリストの指導者と政策は、人種差別、外国人排斥などの差別イデオロギーを悪用して、人々をマイノリティ化し、健康状態を悪化させる

パネル２

優生学および遺伝学

医学専門家は、生物学研究が過去だけでなく現在も人種差別的データを発表することで、特定の社会層にいとも簡単に非科学的なレッテルを貼ってきたことを忘れてはならない。

ユニバシティカレッジ・ロンドンは優生学に大きな役割を果たしてきた。20世紀初頭にロンドンから始まった優生学の考えは世界中に広がり、特定の社会層の人々の経済状態と健康は遺伝で決まると主張された。

優生学の初期研究は、イギリス社会の固定的で厳密な階級区分の影響を色濃く受けて、下層階級を重点的に取り上げた。

優生学者たちは、人々の生まれた日によって、精神的能力、道徳的傾向、犯罪傾向が決定されると主張した。

ユニバシティカレッジ・ロンドンの人種差別主義の先駆者フランシス・ガルトンとカール・ピアソンは、人々のタイプの分類を行った。

特定の階層の人々が優生学的イデオロギーの餌食になるのにほとんど時間はかからなかった。ロンドンイーストエンドの比較的低収入の移民ユダヤ人コミュニティで優生学的調査が行われた。

米国では1927年までに、望ましくない形質を持つ子どもが生まれると「遺伝学的に予想される」人々（男女）に不妊手術を強制する法律が制定された。

その結果、障害者、貧困者、犯罪歴のある人々、「精神衰弱」者などを対象に数万件の不妊手術が実施された。しかし、人種的マイノリティの人々にもこの処置が広げられた。

黒人とアメリカ先住民の女性はとりわけ多く不妊手術のターゲットとされた。Mississippi Appendectomyという隠語で黒人女性に強制された不妊手術は、20世紀後半になっても行われていた。

優性思想は、遺伝的決定論に受け継がれている。イギリスバイオバンクの研究者は、社会的不平等の原因がどこにあるかの研究で、故意かどうかは不明だが、不平等は、社会、政治、環境、歴史から生まれるのではなく、特定階層の内的（遺伝的）差異に基づいて発生したという学説にはまってしまった。

パネル3

日本のアジア植民支配と科学的人種差別主義

帝国主義が世界に吹き荒れていた時期に、西欧諸国は人種の階層的差別化のために科学を用いて、自分達の植民地支配の正当性を主張した。西側の学者は頭蓋骨の計測などの身体的特徴に基づいて、宗主国の白色人種が他の人種より優秀であるという伝播力のある似非科学的主張を行った。

しかし、日本はアジアの周辺国を植民地化する際に、日本人と東アジアの人々の皮膚色などの身体的特徴に差がなかったため、別な人種差別的アプローチをとった。日本人が東アジアの人々よりも優れていることを証明するために莫大な量の「研究調査」が行われた。

ひとつの例は、血液型である。ルートヴィッヒとハンカは、16か国の8千人以上の血液型を解析して1919年のランセットに論文を発表した。血液型の分布によって「欧州人」を最良スコアとして、「中間」および「アジア・アフリカ」の順に人種が3分類された。

日本の科学者たちは、東アジア諸国の人々の血液生化学的指標を研究し、日本人は生物学的に、他のアジアの人々よりも優秀であると主張するものだった。これらの「研究成果」は大日本帝国のアジア支配を正当化する口実に使われた。

パネル４

人種差別と医学実験

人種間の生物学的差異が劣等性を証明するという考絵に基づいて、マイノリティの人々に対する医学実験を正当化する口実に使われてきた。

特に黒人の人々を犠牲にした医科学的実験研究により多くの知見が発表されてきた。

20世紀中盤のタスキーギ梅毒実験と集団収容所におけるナチスの人体実験が、人種差別主義的人体実験の典型だが、人体実験の歴史はもっと広がっている。

しばしば婦人科学の父と呼ばれるジェームズ・マリオン・シムスは、奴隷女性を使って、膀胱膣瘻の外科手術の腕を磨いた。

時には無麻酔で強行したという。こうした人体実験的な「治療」は、ニューヨークの貧しいアイルランド移民女性に対しても行われた。当時アメリカ生まれの白人女性よりアイルランド移民女性の方が劣等であると考えられていたからである。

このような人体実験の結果、黒人やアイルランド移民女性は、より上級の白人女性よりも疼痛に耐えられるというような通念が形成され、人体実験が平気で行われるようになった。

19世紀の初頭のヨーロッパ、明治初期の日本では、ヨーロッパ人以外の人々を見世物にしたり、医学研究材料にすることが常だった。（松崎追加： 人類館事件（じんるいかんじけん、「学術人類館事件」、「大阪博覧会事件」とも）は、1903年に大阪・天王寺で開かれた第5回内国勧業博覧会の「学術人類館」において、アイヌ・台湾高山族（生蕃）・沖縄県（琉球人）・朝鮮（大韓帝国）・清国・インド・ジャワ・バルガリー（ベンガル）・トルコ・アフリカなど合計32名の人々が、民族衣装姿で一定の区域内に住みながら日常生活を見せる展示を行ったところ、沖縄県と清国が自分たちの展示に抗議し、問題となった事件）。

様々な人種の外見的違いを「人間動物園」として人々に見せる（商業的）活動は、20世紀に入っても続き、その後サーチェ・バートマンの事案につながった。

バートマンは1810年南アフリカに生まれたコイコイ族（いわゆる「ホッテントット」の女性で、仲介人の甘言に騙されてロンドンに行ったところ、アフリカ女性の特徴的な容姿に目を付けた業者によって大道芸人にされ、有名人の集まるイベントやディナーパーティでヌード演技を強いられた。

彼女の性器の外形が、黒人の人種的劣等性を象徴するとして喧伝された。

死後ホルマリンの液浸標本にされ、性器と脳の標本が1974年までパリの人類博物館に展示されていた。

1994年に当時の南アフリカ大統領ネルソン・マンデラがフランス政府に返還を要請し、2002年に返還、故郷のGamtoos Valleyに埋葬された

（Wikiより松崎追加）